

車番コード、E3-R21……明日奈の船がほうき星に巻き込まれたという連絡が来たのは日付が変わった頃だった。俺は跳ね起き、司令室へと走った。ビービーと警報が鳴っている。

「司令！ 明日奈……いえ、城国は！？」

「糸崎」

平司令は重々しい声を出して俺を見た。

「彼女の貨物船には大量のキマ鉱石が積んであった」

「キマ鉱石って……防護隊はどうしたんですか！？ コ

ラヌンテ条約でキマ星発着の際、二編成以上の防護隊の並走が義務づけられているはずです！」

「防護隊当直の500-V2とE257-NA07、幡生

と大垣の船は流星群に巻き込まれつつ、中破して帰還。

双方共にE3-R21の船員のほとんどを救出した」

この言い方……同じだ。城国主任の事故の時と……。

「……それって、つまり」

平司令の禿頭がうなだれた。

「唯一、城国君は……間に合わなかったんだ。彼女の船は流星群に飲み込まれて……現在、行方不明だ」

「そんな……っ！」

顔から血の気が引いた。過去の悲劇を頭から追い出す。

平司令は前方モニター前のスタッフに声をかけた。

「網干、観測の現況は？」

「駄目です。ほうき星が光跡と一緒に出すノイズが邪魔で、地上の望遠鏡ではモニタでできません」

網干と呼ばれた若い女性は緊迫した声色を崩さない。

「車上望遠鏡を使うしかないか……」

「そんな！ 危険です！」

スタッフ同士が言い争いを始める横で、俺はたまたま叫んでいた。

「俺が行きます！」

「待て、早まるな！ 単独行動は危険だぞ！」

「でも、明日……いや、城国を放っておけません！」

「分かっている……私として彼女には先代の城国主任と同じ道を歩ませたくない」

「だったら！」

「黙れ！」

平司令は珍しく怒鳴った。

「いいから……少し黙れ」

俺はギリギリと禿頭を睨んだ。

「誰も城国君を見捨てるとは言っていない。だが、流星群に近付いて救出するとなると、外部電源の供給は困難だ。遠隔給電がほうき星のノイズで妨げられる」

「そのためのキマ鉱石でしよう？」

俺たちの後ろから渋い声が出た。

「経済制裁で長らくキマ鉱石の輸入が禁止され、それがようやく解除されたキマ鉱石輸送第一便、車番コードE3-R21。この惑星に残されたキマ鉱石はお世辞にも潤沢とは言えません。城国を救出することには賛成ですが、燃料となるキマ鉱石の残量が気になります」

「宮原……」

ひよろひよろとした色白の男が眼鏡の中から切れ長の目を向けた。

「糸崎。お前の気持ちはよくわかる。でも、お前だけで行くのは無茶だ」

「そうですね、糸崎さん」

「苗穂……」

ポニーテールの女、苗穂の垂れ目も俺を見た。

「糸崎、宮原、苗穂。お前達が救出計画の軸だ。さつき言った通り、ほうき星の近くは外部給電が難しい。内燃

動車でなければ城国を救うことはできない。ほうき星の近くという過酷な環境で、かつ難度の高い操縦が求められる。できるのはお前たちだけだ。……だが、命の危険がある。嫌なら辞退できる」

俺達は互いに顔を見合わせ、どちらからともなく頷く。「行きますすー！」

「ふっ……行きますすよ」

「城国さんのためです。行きましよう」

平司令は俺達を見回し……深い笑みを浮かべた。

「車番コード、485・D032、DD511137、EF8143、各船共に踏切へ移動！ 急げ！」

俺達はドックへと向かう。その先が踏切だ。

* * *

「幡生の500V2から修理だ、第4研修庫に運べ！」

「インバーターが損傷？ バカヤロー、予備を早く持つてこい！ 時間がねえんだ、GTOサイリスタでいい！」

ドックは人で溢れ、修理工の罵声が飛び交っていた。

出口に殺到するのはE31R21からの避難者だろう。奥にはボロボロになって帰還した500V2とE2571NA07。特に500V2は群青色の装甲が痛々しくズル剥けになっている。

「……あれ？」

俺は船がカタパルトに設置されるまでの間、人混みに目当ての人物を探す。

「おーい、大垣、幡生主任！」

「おお、糸崎……」

二人は俺を見つけると駆け寄ってきた。

「すみませんっす、俺達が不甲斐ないばかりに城国先輩を……」

「謝罪はいい、大垣。俺の女だ。俺が連れ戻す」

「へえ、なかなか様になってるじゃないか」「う、うるせえ！」

幡生主任にはやっぱりかかないそうもない。指導を受けていた頃からずっとそうだ。相変わらず俺をからかっただけにやつく。そんなだから婚期が遅れるんだって言ったらぶっ飛ばされた。

「それより、大垣……あの傷、本当にほうき星の傷か？」

後輩はそばかす以外は美男子な甘いマスクを俯けた。

「あたいが仕込んだだけあって察しがいいな、糸崎……」

ワダーンにやられた

「ワダーン……ってことは」

「敵は流星群だけじゃない、ってことっすよ」

大垣の言葉に俺は忌々しく舌打ちした。

「道理でWNミサイルの傷に似ているわけだ。ワダーンの野郎……」

「違う、これは事故だ」

「事故お？」

「事故お？」

俺は幡生主任の顔を見た。彼女は制服のポケットから煙草を引っ張り出す。

「確かに、キマ鉱石を巡ってあたいらの星、ガンフロンティアへの経済制裁を主導したのはワダーンだ。だが、この星の旧上沼垂政権が倒れて10年、制裁もようやく解除された。ワダーンもキマにいたる必要が無くなったから、引き上げを開始していたんだ」

「ワダーンも流星群に巻き込まれたってわけか」

「そうっす。ワダーンは自衛のため、ほうき星を破壊するためにミサイルを使ったんすよ」

流れ弾か……本当か？

「疑うのも道理だ。でも、こればかりは本当なんだ。船の修復費用も一部はワダーンが持つてくれるっす。国

民感情を逆なでしないよう今回の誤射の件、今の若葉台政権は黙っているがな。だが、WNミサイルをモロに喰らったらあたい達もお陀仏だ。あたいらの船の緩衝壁も保ちそうになかったしな。とても城国を助け出すどころじゃなかった。……すまん、糸崎」

「別に責めやしませんよ」

俺は煙草臭さに顔をそむけた。

「……大垣、窒素放出はどうなった？」

俺は本題に触れた。

「したっす。なので、亜空間の発生はある程度抑えられたと思っす」

「キマと光跡……本当によくこんな広い宇宙でかち合ったもんだよな」

俺のぼやきを主任は無視する。

「とにかく行ってこい。あのじゃじゃ馬を乗りこなせるのも、城国を救い出せるのもあんなだけだ」

俺は一礼し、駆けだそうとした。

「ああ、待った」

主任が思い出したように呼び止める。小声で耳打ちされた。

「こんなこともあるうかと、あんなの船のブースターを並列回路から直列回路に変更できるようにいじつといた」

「えっ……でも、平司令にばれたら」

「ふん、あのつるつばげの石頭かい？ 大丈夫、ばれたらちよっと早めの楽隠居だ」

主任はそう言い、白髪交じりの赤毛をぼりぼりとかき

むしった。不敵な笑みの隙間から銀歯が覗く。

「直列にしても過負荷運転になったらあんなのMT54

だとそう長くは持たんし、キマの消費も桁違いだ。大事

に使い。ほれ、これが解放キーだ」

「えっ……でも、平司令にばれたら」

主任はそう言い、白髪交じりの赤毛をぼりぼりとかき

むしった。不敵な笑みの隙間から銀歯が覗く。

「直列にしても過負荷運転になったらあんなのMT54

だとそう長くは持たんし、キマの消費も桁違いだ。大事

に使い。ほれ、これが解放キーだ」

投げ渡されたキーをひつつかむ。俺は今度こそ一礼し、
駆けだした。

* * *

午前2時、踏切。俺は息を切らしながら駆け込んだ。
「今日はどうにか間に合ったな、糸崎。そんなだからい
つも城国にからかわれるんだよ。二分遅れの男ってな」

「う、うるせえな！」

人を食ったような宮原の笑みに俺は赤くなった。踏切
の赤ランプがそれを誤魔化す。

「苗穂は？」

「さあ……」

「ごめんなさい、遅れちゃいました！」

苗穂が大げさな荷物を背負いながら、息を切らして走
ってきた。俺を差し置いて本当に2分遅れてくるとは。

「その荷物、どうした？ 重かっただろ？ 大丈夫か？」

おいおい宮原、お小言は俺だけかよ。苗穂に「デレデレ
なのは毎度のことか。

「そばかす君からかっぱらってきました、天体観測器」

大垣……不憫だ。でもこれがあれば車上望遠鏡が死ん
でも何とかなりそうだ。

「PS206……最新型か。サンキュな」

「おーおー、ようござんしたねえ、宮原さん？ 苗穂か
らのプレゼントとは」

ここぞとばかりに逆襲する。宮原はたじろいだ。

「な……ち、違っ」

「はいこれ、糸崎さんの分」

苗穂から観測器を受け取る。ずっしりと重い。

一つ咳払いがした。平司令が一步前に進み出た。

「揃ったな。城国明日奈、及びE3-R2-1帰還作戦、作
戦名『スワローエンゼル』の概要を説明する」

司令の禿頭が赤ランプに照らされる。

「E3-R2-1の座標位置は車上望遠鏡でなければ分か
らない。ルート5318Pを經由、第六コースナットで
無軌道強硬走破に移行、コースを離脱。そこから流星群
までの距離0・072宇宙キロまで接近してから望遠鏡
を起動、サーチしてくれ。糸崎の485・D032がE
3-R2-1を連結、曳航。宮原のDD5-11137は右
舷、苗穂のEF8-143は左舷を防護」

「あの……私のは外部給電があるE船です。電源車は？」

苗穂がそつと手を挙げ、たわわな胸が揺れる。宮原が
そつと目で追うのを俺は見逃がさない。

「MGシリーズやSIVシリーズでは足りん。KN24
を用意した。高いから壊すなよ。燃料は高純度液化キ
マをフル装填してあるが、連続稼働は14時間が限界だ」

「KYE27じゃないんですか？」

「文句言うな、そんな新型高級品に手が出せるか。こつ
ちはようやく経済を立て直し始めたところだぞ。KN2
4でも発動機は換装してあるからありがたく思え」

苗穂は肩をすくめた。踏切の中を俺達の船が入替機に
押されていく。

「作戦は城国の救出が最優先だ。船は替えがきくが、人
は替えがきかないからな。質問は？」

「ワダーンの陣営はまだ現場にいるんですか？」

俺は幡生先輩の言葉を思い出して質問した。

「幡生から聞いたか……本星から連絡があった。撤収作
業はまだ終わっていない。現場で鉢合わせすることにな
るだろう。ほうき星だけでなくWNミサイルからの防護
のためにも、TGVキャノン砲を各船に二門ずつ積んで
ある。間違ってもワダーンの船には撃つなよ？ 冷戦時
代に逆戻りされてはかなわん」

ちつ、どさくさに紛れて誤射なり流れ弾なりを喰らわ
せようと思ったのに。

「やつと和平が成立して経済制裁も終わったんだ、ここ
で新たに火種を撒く必要は無い。いいな、糸崎？ これ
は弔い合戦じゃないんだ」

「へーい」

俺は肩をすくめた。

「説明は以上だ。各船、0220に発進」

「了解！」

俺達は一礼し、駆けだした。

* * *

船、と言っても車輪の無い列車みたいなものだ。海蛇
と呼ぶ人もいる。俺の相棒、485・D032はその赤
とクリーム色の車体を夜の中に横たえていた。かなり旧
式のMT54反重力装置で銀河に飛び立つこの船は初め
て出会ったとき、ドックの片隅で埃を被っていた。

「時代はDT71だよなあ……やっぱ」

俺は耳をつんさぐような起動音に辟易しながらぼやい
た。慣れれば愛着が湧く……らしい。今は亡き先代のウ
デシ、尾久師匠の言葉だ。

『まあまあ、MT54は起動そのものは早いですが……
。私のはCS29です。本当にノロマなんだから』

ベルトに結んだラジオから苗穂の声が聞こえた。俺と
同じで、嫌そうな声ではない。運転席の横窓を左右それ
ぞれ見ると、宮原と苗穂の船が見える。

機械のチェックを一つずつ丹念に行い、相棒が完全に
目を覚ました。ブローワーが排気を開始し、ゆつくりと船
体が宙に浮く。

進路が開き、高速進行信号が灯る。

「司令室、各船ともに準備完了。カタパルト射出口に接

続しました」

『了解。スワローエンゼル作戦、開始。485・D03

2、発進を許可します』

「了解。485・D032、発進！」

時刻0220。相棒は地を蹴る。

ラジオによると、雨は降らないらしい。

* * *

「踏切に2時集合でしょ？ 2分遅れ……糸崎君も相変

わらずだね」

9年前。

「E3-R20、発進！」

あの日は予報外れの雨が降った。

「援護、頼んだよ！ 2分遅れなんてしたらあの流星群

に放り込むからね！」

宇宙に星の雨が降った。

「光跡予測……やばっ！？」

でも、降ったのは星の雨だけではなかった。

「きやああああああっ！……はっ！？ 783-C

M35、位置喪失！」

血の雨。

「戻って！ 糸崎、戻ってよ！」

そして。

「お父さんを亜空間に置いてなんて……帰れないよ！

私を守ってくれたのに、見殺しになんてできない！」

涙の雨。

「城国……諦めよう。城国司令は、もう……」

俺は。

「嫌……いや、いやああああっ！」

「離してよ、この意気地なし！」

明日奈の手を。

「解結！」

でも。

「おい馬鹿、よせ！」

握れなかった。

「くっそお、またほうき星が来てやがる！」

今も。

「乗れ、明日奈！ こつちだ！」

俺は。

「ホワイトアロー作戦、失敗。E3-R20……現時点で

車籍抹消、放棄します。E3-R21の製造を要請します」

あの日の痛みを覚えている。

「あなたの言う通りね、糸崎……お父さんだけじゃなく

て、相棒まで失うなんて」

明日奈が俺を呼んだって、返事をろくにしなかった。

いや、できなかった。

* * *

『糸崎……糸崎、応答しろ！』

ラジオから宮原の怒鳴り声がした。

「え……あ、お、おう。こちら糸崎」

『いくら彼女が心配だからって、ぼーっとするな！ も

うすぐ第六コースナットだ。軌道離脱準備を』

おっと、そうだった。回想に浸っていた俺は慌てて操

作を開始した。軌道の外、いわゆる外宇宙には小さくワ

ダーンの船団が見える。オレンジ色の点々にしか見えな

いが、近付くと結構大きい。

「へっ、ぼーっとすんな、って？ いつまでも苗穂に対

してもじもじしているウブなお前には言われたくねえな」

『うえっ……なっ……』

ズキャンセラーをL51に設定してください』

『ひやわっ！？』

「了解！」

俺は宮原に少しだけ反撃し、気持ちを落ち着かせた。

いつもクールぶっている彼がこうもあわわするのは見

ていて飽きない。

「ポイント転線確認。軌道離脱。モード変更、無軌道強

硬走破！」

相棒のボディががくぐくと揺れ、軋む。シャンパンの

栓を抜くような音と共に、軌道の継ぎ目から外宇宙に飛

び出した。

「進路よし、出力全開。……待ってるよ、明日奈」

9年前と同じにはさせねえよ……口には出さずとも、

俺は心に誓った。

* * *

惑星、ガンフロンティア。

鉱星、キマ。

この両者の間には0.2光年に及ぶ酸素気流帯が存在

する。地上の空気と違い、酸素濃度はほぼ100%。こ

んなところで爆発が起きたら、いつまでも持たない。宇

宙には空気が無い……そんな太古の常識を覆したのがこ

こ、シエンノバ星域だ。

「スワローエンゼル作戦、第二段階に移行する。流星群

まで距離、0.076。車上望遠鏡、起動。対ノイズ緩

衝壁、出力60で展開」

『了解です』

「……くっそお、ノイズ緩衝壁、展開失敗。再起動しま

す。計画0030秒の遅延です。……KN24と相性悪

いんだよな、これ」

『KN22よりマシだろ。計画遅延、了解』

『だからKEYE27の予算申請をしたのに』

『本当、上の頭の固さには辟易するね』

はいはい、宮原と苗穂は仲良くするのはいいけど俺を挟んでやらないでほしい。ようやくと緩衝壁が起動した。ハイカラな言葉でバリアとかシールドとか言うらしい。知らんけど。薄緑の膜みたいなのが相棒をびっちりりと包み込む。

『車上望遠鏡、起動完了。距離、0.072接近完了。サーチスタート！』

運転台のメーター横、モニターに映像が映し出される。

『明日奈……頼むからあんまり難しい場所に隠れないでくれよ……』

俺は祈るように吹き、前方を見る。ワダーンの船が一騎、俺とすれ違ふ。申し訳程度に挨拶信号を送る。

望遠鏡から解析結果が届いた。

『電波コードPBR4000、モードEを受信……明日奈の船の救難信号だ！ 宮原、苗穂、見つけたぞ！』

『ホントですか！？』

『座標位置は？』

『ちよっと待ってくれ……』

俺はじりじりしながら望遠鏡が座標を吐き出すのを待った。軽い電子音と共に表示された。

『いいか、転送するがまずは読み上げる。X76・Y19・Z53だ』

『空間次元は？』

『通常の3次元+Hだ』

『亜空間に飲み込まれなかったのはラッキーですね』

『ああ。大垣の窒素放出が効いたな』

俺はブースタースイッチを入れようとした……。

(大事に使え)

……いや、やめておこう。

『陣形維持、現速維持！』

『緩衝壁展開！』

『TGVキャノン、自動防護射撃用意！』

『始めようか、天体観測をな！』

俺達は二本の光の矢となり、流星群へと突っ込んだ。

* * *

流星群、ほうき星。

その美しさは、恐ろしいほどのエネルギーの副産物だ。

その正体は杳として知れない。分かっていることは二つ。キマ鉱石に代表されるエネルギー鉱物が一点に、大量に存在すると現れやすいこと。もう一つ、ほうき星の光跡が発するノイズは、船に数々の異常や不調をもたらす。場合によっては亜空間に連れ去ったりすること。つまり、下手に近付いたら一卷の終わりだ。

『こちら485・D032、まもなく光跡帯に突入します。スワローエンゼル作戦、第三段階に移行します』

『こちら司令室。了解。光跡帯では地上との通信が不可能となる。僚船との連携を怠るな。幸運を祈る』

『了解！』

へっ、祈ってどうする。幸運なんて明日奈ごとく掴みしてやる。

『ブースター点火！』

今度こそスイッチを入れる。でも、まだ並列回路だ。

『周波。ハルス変更、ラピートモード』

『目標物座標位置修正、X79・Y6・Z55』

『突っ込むぞ！ 対衝撃体勢！』

メリメリと相棒のボディが悲鳴を上げ、メーターが二度瞬く。

『きゃあっ！ はっ……ATC車上子、ダウンしまし

た！ ATSにバツ……ツプします！』

『大……か、苗穂！ ちっ、……担当め、……たら雷隠

詰めだ！』

光跡帯に突っ込むと船同士でも会話がままならないことさえある。

『ノイズ緩衝壁、全開！』

緑色の緩衝壁がオレンジ色に変化し、通信が復活する。

『……崎！ 糸崎！ 来るぞ！』

『えっ！？ わあっ！』

真下で爆発が起こった。一瞬、電源が落ちる。

『糸崎さん、大丈夫ですか！？』

真下をモニタすると、苗穂のTGVキャノンが青い火を噴いていた。モニター映像もビリビリと歪んでいる。

『しっかりしろ！ 苗穂の援護が無かったら死んでいたぞ！』

『るせー！ そんな簡単にくたばらねえよ！ 苗穂、サ

ンキュー！』

『宮原くん！ 左方62度！』

『了解！』

光跡帯を突っ切るということは、上下左右からランダムに飛んでくるほうき星をかわしつつ進むということだ。

俺達みたいな熟練でもあつけなく命を落とす。宮原のキャノンが迫るほうき星を粉々にし、俺の背後でDT54が低く荒々しい唸りを上げている。

『重力が錯綜してるな……糸崎、お前の船大丈夫か？』

『大丈夫さ、あいにく頑丈だけが取り柄だ。そっちこそオーバーヒートすんなよ！』

俺はこの場に慣れている。だからこそ気を引き締めた。

突如、俺のTGVキャノンが火を噴いた。背後でピンク色の閃光が轟く。

『な、何だ!』

「……ワダーンのWNミサイルか! おいてめえ、気をつけるワダーンこの野郎!」

オレンジ色の不格好なマンボウみたいな船が旋回して小さくなっていく。爆発の勢いで迫っていたほうき星は進路を僅かにずらし、他のほうき星と衝突した。

「やっべえ……補助緩衝壁展開! ブースター停止、エネルギー転送!」

落雷と竜巻と大地震を掛け合わせたような衝撃波が俺と相棒を襲った。

『わあ……』

『きゃ……』

僚船との通信が途絶えた。

* * *

チカチカとメーターが瞬き、切れかけた動力が回復する。警報も鳴らず、幸いにして船体に異常はなさそうだ。

「はあ……はあ……補助緩衝壁が間に合ったな。つつ、

おい、宮原、苗穂! 大丈夫か!」

『……こちら宮原。大丈夫だ! 問題ない!』

『こちら苗穂! 電源車KN24を喪失! 非常内部電源に切り替えます!』

「なっ……!? おい苗穂、やべえぞ!」

非常電源だけでは軌道に戻るだけで精一杯だ。

『車上望遠鏡にも反応が無い……亜空間を作って自身も消滅したか! EF8143にキマコネクター接続、エネルギー急速転送!』

宮原は間髪入れずにケーブルを発射した。

『ありがと、宮原くん……っ、レーダーに反応! 城国さんの船です!』

「えっ!?!」

『馬鹿な!? どうやってさっきの座標からここまで移動してきたんだ!』

「乱重力か何かだろ。そんなことはどうでもいい、近くにいる今がチャンスだ!」

『でも、苗穂にこれ以上の活動は無理だ!』

「代理を呼ぶ時間はねえんだよ! 俺だけでも行く!」

ブースター点火! 進路再計算!」

MT54が再び唸り始める。

『ぶざけるな! コラヌンテ条約を破ったらまたワダーンにいちやもんをつけられて、冷戦に逆戻りだ!』

「知るか、そんなもん!」

また俺のTGVキャンオンが発砲した。青い彗星となつてワダーンの船へ……いや、その真後ろに迫っていたほうき星を木っ端みじんにした。

「お前、苗穂が同じ状況になつてもこのまま引き下がるつてのか!?!」

『え! お、おい、糸崎……はあ、苗穂、悪い、お前は一旦引いてくれ! あの単細胞にだけ行かせることはできない!』

「おい、誰が単細胞だワレえ!」

『んっ……了解です。コネクター解結、EF8143、撤退します! 軌道に戻ったら代理を呼びます!』

「頼んだ! 今行くぞ、明日奈!」

ほうき星をかくぐりながら、EF8143はその深緑の船体を小さくしていった。後にさつき助けたワダーンの船も続く。黒帯が尾翼に描かれている……旗艦か。

俺と宮原はそれを尻目に操縦桿を握り直した。

「進路再計算、完了! ……あそこだ! いたぞ!」

右前方にふよふよと、白とピンク色の海蛇が浮かんでいる。船体が青白い光で包まれている。辛うじて緩衝壁

だけは生きているようだ。

「時刻1841、E3R21を肉眼で確認! これより連結に移る! 防護は任せた!」

『了解!』

宮原のキャンオンが連射を開始する。

「車上望遠鏡、リンクモード変更。TGVキャンオン自動射撃解除。連結マニュアルKH261、入力完了!」

船の先頭、運転台の真下が開く。中からごつい梃子のついた吸盤が出てくる。

「距離、3地上キロ。速度、283地上キロ。進路異常なし。力行停止、重力ブレーキ出力76%……ぐあっ!」

激しい振動が相棒を襲った。警報が鳴り、モニタ上で

3号車が赤く明滅する。

『すまん、糸崎! 破壊したほうき星の破片に注意だ!』

「そこまでしっかり潰し尽くすのがためえの仕事だろ! ……ちっ、車上望遠鏡が潰された! 3号車に損傷確認、耐熱処置、窒素放出!」

光跡のノイズとキマ鉱石、そこに高純度の酸素が組み

合わされると亜空間への穴ができる。城国司令のように飲み込まれるのはごめんだ。窒素放出で酸素濃度を下げる。

「進路再……わあああ!」

俺の船は爆発の衝撃で吹き飛ばされ、明日奈の船に突

つ込んだ。めりめりと船体がねじれ、フロントガラスにひびが入る。

「つつ……宮原、どうした! 大丈夫か!?!」

『……ああ、何とか大丈夫だ。ワダーンのおかげでな!』

「はあ!?! 流れ弾か!?!」

ノイズが一気にひどくなり、通信が途切れた。

「わ、何だこれ! くそ、補助緩衝壁展開!」

オレンジ色の緩衝壁が赤くなり、ぶち当たったE3R

21ごと包み込む。光跡のノイズがばちばちと当たり、緩衝壁に無数の波紋を描く。

「……また派手な光跡だな。おい、宮原！ 応答しろ！」

『糸崎！ 糸崎、聞こえるか！？』

「ああ、どうにか生きてるぜ。何があった？」

『ほうき星の親玉を潰したところだ！ ワダーンのWNミサイルの援護で助かった！』

ワダーン、まだいたのか。オレンジ色のマンボウがまた一隻、光跡帯を突き抜けていく。

しかし、まずいことになった。船体がめり込んだのは明日奈の船の先頭号車側面だ。下手に動くと明日奈ことすり潰しかねない。

『糸崎、どうする？ ほうき星は親玉を潰したとはいえまだどんでん向かってくる。連結をやり直すか？』

「いや、そんな時間はねえ。宮原、E3-R21の1号車と2号車を切除解結。2〜6号車を曳航してくれ！ 俺は明日奈を引っ張り出したら1号車を曳航、後を追う！」

『正気か！？ 9年前と同じことをするのか！』

「ああ！ 時間がねえんだよ！ 明日奈を助けるなら船体がめり込んで動けない今がチャンスだ！ 最悪明日奈だけでも生身で引っ張り出すさ！」

『頭でも打ったか？ 1気圧近く確保されている酸素気流帯とはいえ無茶だ！』

俺は宮原の通信を無視し、明日奈の船を見た。大垣の天体観測器を引っ掴み、ひび割れたフロントガラス越しに目を凝らす。

「……明日奈、どこだ？ どこにいる！？」

『春人！』

ラジオに少し甲高い女の声が割り込んだ。

「明日奈！？」

* * *

「明日奈、大丈夫か！」

『うん、無事！ 平気！』

俺は胸を撫で下ろした。

「……ほうき星に吹き飛ばされてお前の船に突っ込んだじまった。すまん」

『大丈夫……でも、内部電源が持たない』

『おい、二人とも。夫婦の会話を邪魔したくはないが、時間が無い。急いでくれ。城国、再起動できないのか？ 冷やかし交じりの小癪な声が聞こえた。』

『あれ、みやつち？ はるちゃんは？ フラれた？』

『ばっ、馬鹿言え！ 苗穂とはそんな仲じゃない！』

『えー、それはるちゃんに言っちゃおうかな』

『お、おい、よせ！』

「……何だか、あんなだけ明日奈を心配していた自分のことが馬鹿らしくなってきた。」

「宮原、俺の女に手を出したら亜空間に放り込むぞ。……それで、明日奈？ 再起動は？」

『全然ダメ。主回路が断線しちゃって……補助回路と非常回路で緩衝壁を展開するのがやっと』

「主回路断絶はどうしようもねえな……明日奈、今から俺と宮原で緩衝壁を全展開する。泳いで俺の船まで来てくれ。数メートルだ、大丈夫だろ？ 9年前と同じだ」

『おい、糸崎！ 本気なのか？ 今回は9年前とはほうき星の数が桁違いだ！』

「作戦の主目的は明日奈の救出だ。明日奈さえ乗せてしまえば後はどうにでもなる」

俺は少し宮原と押し問答を繰り返したが、明日奈自身の賛成もあつて宮原も折れた。

『分かったよ……城国、ちょっと待っててくれ。すぐに準備する。命綱を結んでおいてくれ』

『オッケー、了解！』

「宮原、緩衝壁を全展開してから窒素放出も頼んだ！」

『了解！ ……待て、あのほうき星をやり過ぎすぎぞ！』

頭上をほうき星が抜け、光跡のノイズが船体を穿つ。

『よし……緩衝壁、補助緩衝壁、出力全開。DD51-1137、485-D032、E3-R21、各船1号車に集中配置、多重展開！』

互いの船の緩衝壁が重なり合い、真っ赤に燃える。外宇宙が半透明になるほど分厚い壁になった。

「窒素急速充填、開始。比率20%。手歯止め設置！」

「春人、命綱の準備できたよ！」

「窒素充填完了！ 糸崎、城国、今だ！」

「よし、来い！」

俺は運転台から立ち上がり、デッキに向かう。ドアを開けると、明日奈が勢いよく無重力の空間へと飛び立つのが見えた。ツインテールの黒髪がバサバサと波打つ。

「春人！」

俺は彼女の後ろを見て、戦慄した。

宮原の野郎、親玉は潰したって言ったじゃねえか！

「明日奈、手を！ ほうき星が来る！」

伸ばした手が掴まれる。彼女はそのまま俺の胸に飛び込んできた。俺はしっかりと受け止め、ドアを閉めた。

「伏せろ！」

* * *

目を開けると、えらいことになっていた。

「明日奈……明日奈？ 大丈夫か？」

「う……ん。春人、重い……」

「え？ あ、悪い悪い」

とっさに身をかがせた結果、彼女は完全に俺の下敷き

になっていた。

「静かだね……電源が落ちた？」

「えっ」

確かに船内は暗く、静寂を俺達の声が切り裂くだけだ。

『……国、城国、糸崎！ 応答しろ！』

ラジオが震えた。

「宮原！ 無事か？ 俺も明日奈も無事だ」

『生きてはいるがまずいことになった。ほうき星がE3

→R21を直撃、各自号車がバラバラになった』

「えー？」

明日奈が俺のベルトに飛びつき、ラジオをひったくろ。

『手元に残っているのはお前の船がめり込んでる1号車

だけだ。残る5両のうち2号車と6号車は大破、積み荷

のキマ鉱石が反応して……亜空間を作っている。かなり

大きいぞ』

「残る3両にもキマが積んであるけど、座標位置は分か

る？」

明日奈の顔は真っ青になっている。

『いや、車上望遠鏡がノイズの直撃を受けて機能停止し

た。とても分からない。いつ亜空間ができてもおかしく

ないな』

「そんな……」

明日奈はがっくりと肩を落とした。相棒を喪うのは二

度目だ。その気持ちは痛いくらいに分かる。

「明日奈……とりあえず、観測器がある。それで残る4

両を探し出して、曳航して帰ろう。な？」

俺は優しく手を握り、言い聞かせる。9年前と比べて

彼女は強くなった。

「……うん、行く」

『糸崎、どうする？』

俺は明日奈の手からラジオを取り戻した。

「どうするもこうするも、残りのキマを放っておくわけ

にはいかねえよ。探し出して曳航するなり何なりする」

『……そう言うと思ったよ。でも、城国主任の二の舞は

ごめんだ。無理はしないぞ』

「分かってる分かってる。大垣から借りた観測器もある

から、何とかなるだろう」

俺は楽天的に言い、運転台に戻る。早いとこ相棒を再

起動させないと面倒なことになる。

「げっ……宮原、こっちは車上望遠鏡はおろかTGVキ

ヤノンも片方死んだぞ」

『TGVキヤノンは俺に任せろ。むしろこっちは第二動

力炉がやられた』

「メインじゃなくて良かったな。走れるか？」

俺の背後でMT54が息を吹き返した。

『どうにかな。ターボ全開でやっ普通運転だ。緩衝壁

範囲拡散、進路設定完了、X58・Y22・Z64、ま

ずは軌道を目指す』

「了解。明日奈、観測器を頼む」

「オツケー……うん、生きてる。周波パルス、ラピート

2に変更。どこ行った、私の相棒……？」

「進路設定完了。485・D032、発進！」

『DD511137、発進！』

二匹の海蛇はミシミシと傷んだ船体を軋ませながら、

軌道へとUターンを始めた。

* * *

亜空間に吸い込まれたものが戻ってきた試しはほとん

どない。亜空間の中は時間の流れが全く異なるようで、

仮に何かが戻ってきたとしても何千年もほったらかしに

されたかのようにボロボロで、触っただけで崩れ落ちて

しまうようなものばかりだった。

それだけに、明日奈が亜空間の中に見つけたものは信

じられないものだった。

「春人、みやっち、観測器に反応！ ……ええ、なにこ

れ！？」

「どうした？」

「相棒が見つかったのか？」

明日奈はすぐには返事ができず、呆然と観測器の表示

画面を見つめている。

「おおっと！」

俺はほうき星を避けた。さっきの衝撃で操舵系統が少

しいかれたらしく、相棒のバランスがぎこちない。

「……明日奈？」

「春人……これ……」

明日奈は俺に画面を見せた。

「車番コード、783→CM35……何だっって！？ おい、

明日奈！ これって……」

『おい、さっきからどうしたんだよ？ 話が読めんぞ』

「宮原……城国主任の船だ」

『え』

またほうき星をかわす。

「亜空間の淵に、車番コード、783→CM35……城国

主任の船があるって結果が出たんだ」

『……何！？ おいおい、こんな時に嘘だろ……おい、

糸崎！ 観測器に反応あり、E3→R21……6号車だ！』

「何だっって！？ 明日奈、座標位置は！？」

「待って……私の船でしょ？ 亜空間に近い！ X7・

Y66・Z12って出てる」

俺は座標の方、左上空を見た。七色の輪郭に彩られた

漆黒の大円、亜空間がぽっかりと口を開けている。

「春人」

俺は明日奈の言いたいことが分かった。

「……下手に近付くと俺達も吸い込まれるぞ」

「でも！……でも、せっかくお父さんに会えそうなのに！……また9年前みたいに黙って見捨てるの！？」

『落ち着け、城国。それこそ君は9年前、無理に城国主任の船を引つ張り出そうとして自分の船まで喪つた。あの時は糸崎が頑張ってくれて命だけは助かったが、今度も同じようにいくとは言えないぞ』

「今度も同じように失敗するとも限らないでしょ！」

宮原の冷静な意見にも聞く耳を持たない。

「明日奈、落ち着け。冷静にならねえと助けられるものも助けられねえぞ」

「でも、春人！」

明日奈は俺を睨み、それから亜空間を睨みつけた。

「……お願い。もう一度お父さんに会いたい。それが駄目なら、せめてお父さんのお墓に、骨の一本でも入れてあげたい。そうしないとお母さんもひとりぼっちで可哀想だしさ」

「……」

俺は明日奈の気持ちを汲んでやりたかったが、勢いに任せて言っているんじゃないだろうな？……これ？……冷静でないとまず間違ひなく死ぬぞ。

「春人、お願い！」

「……交換条件がある」

「え？」

「ガンフロンティアに戻ったら……お前のパンツ見せろ」

明日奈の顔が火を噴いた。

「……は、はあ！？……やだ、この変態！」

「よし、正気だな」

「どういう意味よ、頭沸いてるのはあんたでしょ！」

「亜空間に飛び込むって言って聞かないお前には言われたくねえよ！」

『おい、二人とも！……亜空間が閉じるぞ！……このままだと6号車も飲み込まれる！……どうするんだ！』

明日奈がラジオを手にした。

「みやっち、一つ頼んでいい？……6号車を撃ち落として」

「えっ……明日奈、お前」

『馬鹿言え、相棒をそんな無下に扱えないだろ』

自前の相棒を持つ……それは、ウテシの最高の栄誉だ。そう易々と手放せるものではない。

「どうせ2両が大破して、もう使い物にならない。それに……どうしてもお父さんに会いたいの。そのためなら私……だから、お願い！……撃ち落とすとして！」

確かに、大量のキマを積んだ船だ。うまく撃ち落としたり亜空間が広がって時間稼ぎになる。

「やってくれたらほるちゃんに頼んであげる、膝枕」

『うっ………はあ、今回だけだぞ！』

宮原は折れ、彼のTGVキャノンが炸裂した。宮原の野郎、頭でも打ったか？……クルルなのは見た目だけで実際はただのドスケベじゃねーか。青い彗星たちが白とピンクの船体をめがけてぶつ飛んでいく。

元々ほうき星の直撃を喰らい、ポロボロになっていた船体はあつけなく砕け散り、積み荷のキマ鉱石がばらまかれた。

ほうき星がまた一つ、俺達をめがけて飛んできた。今度は俺のTGVキャノンが青い火を噴いた。

「補助防護壁展開！」

破片が脇をすり抜け、亜空間へと吸い込まれていく。その姿は見事だった。光跡と鉱石、その二つはち合

うと大輪の花火を咲かせた。花火の中心に、宇宙の闇より深い漆黒の円ができ、それが水面に浮かべた油のように他の亜空間と連々と繋がる。亜空間の収縮は止まったようで、口がどんどん開いていく。

「ナイス、みやっち！……観測器に反応あり！……3号車！……X44・Y32・Z78！……みやっち、撃ち落として！……春人、近付ける？」

『了解！』

「へっ、しゃーないな！……時刻0200、スワローエンゼル作戦は現時刻をもって破棄！……第二次ホワイトアロ

ー作戦を開始する！……しっかりとつかまつてろよ！……重力ブレーキ解除！」

「……お父さんを助けるなら今のうち！」

「だからお父さんを助けるなら今のうち！」

「だからお父さんを助けるなら今のうち！」

「分かってる！……ブレーキ投入、17%！」

「……お父さんを助けるなら今のうち！」

「明日奈、後ろのほうき星のコース計算を頼む」

「え？ うん……わっ、でかつ！ えーと、X31・Y67・Z80！」

4号車を破壊しないと時間が足りない。キャノンが駄目なら、ほうき星ごとぶっ潰す！

「ちよつと寄り道するぞ」

俺はUターンした。亜空間が遠ざかる。

「ちよつと、どこ行くの！ そつちじゃない！」

『おい、糸崎、どうした！？』

「俺に考えがある！ 宮原、さつさと3号車を撃ち落とす軌道に戻れ！」

『はあ！？』

俺は相棒をほうき星に向かって走らせた。

* * *

ほうき星の速度は船の上回ることが多い。それは、今迫っているほうき星でも例外ではなかった。

「春人、何するの！？」

「口閉じてろ、舌嚙むぞ！」

俺はTGVキャノンのスイッチを切った。自己防衛の手段を失った相棒はギャーギャーと警報音を鳴らす。

「なにやってんの、ほうき星と正面衝突する気！？」

「ほうき星に体当たりして軌道を変える。そのまま4号車に突っ込ませて亜空間を作る。ほうき星の速度は！？」

「え、そんな無茶」

「早く！」

「あつ、はい！ えと、580光速キロ！」

「ブースター直列でギリ行けるな。明日奈！ 死んでも恨みつこ無しだ、愛してるぜ！」

「ま、待って、ジョーダンキツいってばあああああ！」

ほうき星が目前に迫ったその時、俺は操縦桿を一気に

横倒しにした。相棒はへアピンカーブの軌跡を描き、その軌跡はほうき星にかき消される。

相棒とほうき星が並走した。そのまま俺は、また操縦桿を倒す。

相棒の黒い船体がほうき星に体当たりした。

「きゃあああつ！」

派手に船体の装甲が傷つき、ひしゃげる音がする。でも俺は操縦桿を戻さない。

「ブースター直列回路、全開！」

俺は幡生先輩からもらったキーを差し込み、禁じ手に打つて出る。瞬間、MT54が血の雄叫びを上げ、出力が爆増する。ミシミシと船体が軋み、泣く。

「ほうき星……曲がれえええええつ！」

相棒……頼む！

「春人……」

緩衝壁に回すエネルギーもなく、直撃するノイズで電子回路が狂い始めた。

「曲がれええええええつ！」

ほうき星の光跡が徐々に緩やかなカーブを描き始めた。「こんなもんか。ブースターオフ、重力ブレーキ全開！」

急ブレーキをかけた俺の船を置いて、ほうき星は疾走する。……確かに変わったその軌道の先には、E3・R2

1の4号車が待ち受けていた。激突。

見たこともないほど立派な大輪が咲き、亜空間の姿が一回り大きくなった。

「……ふう、何とかなったな」

俺はTGVキャノンのスイッチを入れた。警報が切れる。明日奈は何も言わない。俺の首筋にしがみついたままカチコチに硬直していた。

「しゃんとしろ、明日奈、行くぞ！ お父さんに会いに！」

「え……あ、う、うん！」

その時、ラジオが怒鳴った。

『糸崎、急げ、収縮が始まった！』

「え、もう！？」

宮原の声に俺と明日奈は亜空間を見た。漆黒の穴は二度明滅を繰り返したかと思うと、そのまま収縮を開始した。

「……やつべえ！ ブレーキ解除、ブースター直列全開限流値上限解放！」

俺は慌ててMT54を吹かす。亜空間の重力も相まって、相棒はとんでもない速度で突っ走り始めた。船体が酸素と激しくこすれ、段々と発熱を始める。

「くそつ、窒素展開、耐熱処置！」

風圧に耐え切れず、装甲がべりべりと捲れ始める。

「……まずい、明日奈！ 間に合わない！」

「そんな、4号車の時間稼ぎは無駄だったの……えつ！？ 観測器に反応！ ……KN24？」

KN24……苗穂が失くした電源車か！

「苗穂の置き土産だ。明日奈、キャノンを頼む！ 座標をセットして自動追尾にすればお前でも撃ち落とせる！ あの電源車にはキマが詰まっている！」

「え、……わ、分かった！ オッケー！」

でも、遅かった。俺のTGVキャノンは最後の一発を噴き、知らぬ間に迫っていたほうき星を撃ち落とした。

「春人……弾切れ」

「えつ……そんな」

もう駄目だ。そう思った、その時、何か相棒を追い抜いた。

「ピンク色の光跡……WNミサイル！？ 何で！？」

明日奈も叫びをよそに、数発のWNミサイルがKN2

4を撃ち落とした。爆発、大輪、そして広がる亜空間。

俺はバックミラーでWNミサイルの軌跡を辿った。その先には……さっき助けたワダーンの旗艦がいた。

「ワダーン……あの野郎、なかなか味な真似をするじゃねえか」

「え？」

「ワダーンの恩返しだ。行くぞ！ どうか間に合いそうだ！」

もうなりふり構っちゃられない。俺の相棒は時空すら超えそうな勢いで亜空間の淵を疾駆した。

『糸崎、城国！ そのまま進め！ 必ず帰ってこいよ！ じきに応援が来る！』

「勝手に死亡フラグを立てるんじゃないやねえ、このむつつりメガネ！」

「見えた！ 春人、あそこ！ 2分で決めるよ！」

明日奈が指さした先に、783-CM35はその銀色の船体を横たえていた。さっきまで吸い込まれずにいたのに、じりじりと亜空間の中へと移動している。

「解結！」

俺は先頭の連結器を引っ込める。めり込んでいたE3-R21の残骸は外れ、亜空間へと吸い込まれた。前方の連結器はひしゃげて使いものにならなくなった。

「重力ブレーキ非常出力、ブースター逆噴射！」

がっくんと減速し、俺と明日奈は前につんのめった。

「明日奈、最後尾を頼む！ 後ろに連結する！」

「オッケー、任せといて！」

彼女はツインテールをなびかせて最後尾に駆けだした。「連結用意！」

『春人、もつと速度を落として！』

「あいよ！ 前進、ブースター出力65！」

車窓の流れが格段にゆっくりになる。

『右に2度！ 下に16度を維持！』

「了解！」

チャンスは一回、失敗は許されない。操縦桿をずらす。

『速度をもつと落として！』

「おう！ ブースター全開！」

車窓がさらにゆっくりになり、結構な衝撃が走る。

「明日奈、どうだ、大丈夫か！？」

『……連結成功！ カプラーにヒビが入って給電できないけど、とりあえず大丈夫！』

「よし、つかまれ！ 脱出するぞ！ ブースター直列回路、限流値上限解放！」

MT54が血を吐くように叫び、485-D032は

激烈な重力に逆らいながら重々しく走り出した。

亜空間がどんどん収縮する。

「くっ……なんて重力だ！ 頼むぞ、相棒……持ちこたえてくれ！」

しかし、神は時に残酷だ。

オーバーヒートしたMT54が黒煙を上げ始めた。

「わっ、何、この煙！」

このじゃじゃ馬！」

俺の叫びと裏腹に、出力メーターの針が落ちた。

「……ごめん、春人」

「……え？」

船体が亜空間にみるみるうちに吸い込まれ始める。

「私が……お父さんに会いたいって言ったばかりにこんな……」

「明日奈……」

俺はツインテールの女を見る。その顔は見たことが無いほどに穏やかで、悲壮だった。

笑顔を作る。せめて、死に際くらい笑っていたかった。

「いいさ……あの世に着いたら、パンツ見せろよ」

「……バカ」

明日奈は力なく笑い、俺の首元に抱きついた。

ラジオから声がした。

『……つたく、世話が焼けるねえ』

え？

『あんたらはまだ若いんだ。そう簡単に諦めるのは、このあたりが承知しないよ』

この声は……！？

『上を見な、上だよ』

俺と明日奈は声の主に気づき、上を見る。

『500-V2……！ それにEF81-43！』

『幡生の姐さん……！ はるちゃん！ え、何で！？』

『助けに来ました、糸崎さん、城国さん！』

『大捕り物じゃないか、あんたたち。今そっちに行くからね、もう少しの辛抱だよ！』

未だ生傷が痛々しい群青色の船が783-CM35の

最後尾に連結される。俺達は一気に軌道に引き上げられ、

亜空間は最後に七色の光芒を放ち、その口を閉じた。

* *

ガンフロンティアの基地に戻り着いたのは夜明け前だった。疲れ切った俺達を出迎えてくれたのは、ひたすらに歓声と、いつもの喧噪だった。

「よく帰ってきたな、糸崎、城国。ご苦労さん」

「お疲れ様です、先輩！」

「幡生主任、大垣……任務完了、帰還しました」

「おい、糸崎！ 船を派手にぶっ壊しやがって！ 9年前の比じゃねえぞ！」

「あ、悪い悪い」

「誰だ、KN24を隠したのは！ おい苗穂、お前か！」

早くKN24を出せ！ 高かったんだぞあれ！」

「ふええ……」

「あ、はるちゃん！ みやつちとの約束だから膝枕お願いね！」

「お、おい、城国！」

「ええーっ！？ そんなの聞いてませんよお！」

「いよっ、宮原！ このイ・ロ・オ・ト・コ！」

「ばっ、ち、違っ、苗穂、これには深いわけが……」

「それよりも苗穂先輩、早く観測器返して下さいっす！いつまで持つてるんすか！」

「苗穂、ちよつと医務室に来てくれ！」

……カオスだ。特に苗穂が。俺は頭を振り、明日奈を呼んだ。

「明日奈、平司令のところに行こう。第6ドックにいるはずだ」

明日奈の笑みが消え、少し緊張した面持ちになった。

「あたしも行くよ」

「幡生主任……」

「あたいを差し置いて楽隠居するなんて、そうは問屋が卸さねえぞ？ ……後輩の泥を被るのもあたいの仕事だ」

主任はそう言い、さっさと歩きます。俺と明日奈は彼女の後を追った。

* *

第6ドックには平司令と、幾人かの修理工、医療スタッフがいいた。

「邪魔するよ」

「幡生主任……それに糸崎、城国」

平司令は禿頭を光らせながら駆け寄る。

「糸崎、城国、怪我は？」

俺と明日奈は揃って首を振る。司令は表情を緩めた。

「司令……E3-R21の件ですが……」

「皆まで言うな、既にワダーンから連絡が来ている。糸崎、ワダーンの旗艦をほうき星から救ったそうだな？」

ご苦労。それに免じてブラスターの違法改造の件は見逃してやる。次は無いぞ」

「はい……ありがとうございます」

俺は苦笑いする。幡生主任はあさつての方向に顔をそらした。

「それと、城国、船の件は残念だったな。ほうき星が直撃して編成分解、大破してやむなく放棄したと宮原から報告を受けている。しかし、現状ではE3-R22を製造する余裕が無い。申し訳ないが、しばらくの間は代理船に乗務してもらおう」

「はい……」

さすがに明日奈はしよげていた。でも今は、もっと差し迫った問題がある。

「平」

幡生主任が司令を呼んだ。

「で、あの船はどうすんだい？ 亜空間帰りつてことはどうせ長くは持たんだろ」

「それが……今までとはどうも様子が違うんだ」

平司令の禿頭がドックの中央に鎮座する銀色の船……783-CM35に向けられた。既に何人かのスタッフが目検を始めている。

「違っつて……んん？ やけに劣化が浅いね、この船」

「まだまだ新品ピピチみたいじゃないか」

「みたい、どころではない……文字通りの新品なんだ」

「ええ？」

幡生主任が船に近づく。足回りを覗き込んで、何かに気付いたようだ。

「……この船、消える前にGTOサイリスタに主制御器を換装してたよな？ 何でチョッパ制御なんだ？」

チョッパ制御って……9年前でも骨董品扱いされていた制御方式だ。今やGTOサイリスタですら旧式なのに。

「分からない。しかもそのチョッパ機器もほとんど劣化が見られない。使った形跡はあるが、ほぼ新品同様だ」

「……それより、父は……城国前主任は？ 遺体は無かつたんですか？」

平主任は明日奈の方に向き直った。

「この船がここまで新品の状態で見えられた理由として、二つの仮説が挙げられた。一つ、何者かが783-CM35の新製時に複製を作り、人知れずどこかに保管していた」

「複製？ 誰が？ 何のために？」

俺の問いに平司令が頷く。

「その問いに答えられる適切な回答が考え付かない。つまりこの仮説は間違いか、証拠が足りない。だから、もう一つの仮説を立てた。……亜空間の中は時間の流れが

我々の世界と逆転しているのではないかと」と

「船が若返ったことでですか？」

明日奈は大声を上げた。ツインテールがうねる。

「そっだ」

「そっだ、って……そんな馬鹿なことが！」

明日奈の顔には混乱が張り付いている。

「城国、考えてみる。今まで亜空間に取り込まれたものはほとんど戻ってきたことはない。それが時間の逆転作用により物体が生まれる前まで時間が戻ったからだとしたら？ そうすれば時間進行による老化や経年劣化どころではない、存在そのものが消えてしまうことになる。亜空間から戻ってこないこととの整合性もそれなりにつ

けられる。まあ、過去の事例とは矛盾するが……」

簡単には信じられない話だ。でも、そもそも宇宙には突拍子もない事実がゴロゴロしている。矛盾の一つや二つ、取るに足らない。これくらいの仮説は驚くほどのことではない。いや、驚いているけど。

「でも……何か証拠はあるんですか？」

俺はたまらずに問いかける。しかし平司令はそれに答えず、幡生主任を呼んだ。

「幡生、二人を医務室に」

幡生主任は黙って頷くとドックから出る。俺と明日奈は後を追った。途中で宮原と合流した。

「糸崎。485・D032だが、被害判定が出た。大破が妥当なところだが中破だ。N40リニューアル改造はしない。普通の修理が適用されるから、長くかかるぞ」

「げ、マジか。あーあ、DT71はお預けかよ」

「ブースターを直列回路にするなんて、なんて無茶をしたんだよ。MT54が耐えきれずに起動停止したから良かったが、もっと頑丈な動力炉だったら熱暴走、下手す

れば爆発していたぞ」

「主任の粋な計らいだよ。それに、MT54が止まって

俺と明日奈は亜空間に飲み込まれかけたんだぜ」

宮原はやれやれとため息をついた。

「あんたたち」

幡生主任の声がした。医務室のドアの前で、いつになく真剣な表情をしている。

「……ちよつと驚くだろうが、大声は出すなよ？ いいな？ 特に城国」

「え……はい」

幡生主任は一つ頷くと、ドアを叩いた。

「苗穂、入るぞ」

ドアが開くと、奥のベッドに誰かが寝ていた。苗穂はその横で静かに座っている。口に人差し指を当てる仕草をした。

俺達はベッドを覗き込んだ。成人するか否かくらいの若い男が寝息を立てている。俺達より若い。

「……お父さん？」

明日奈が小さく、でも十分な驚きと共に呟いた。

「うそ……でも、若い頃のお父さんにそっくり……」

「ああ、そっさ」

幡生主任は頭をかきむしりながら言う。

「真正正銘、城国鶴二郎……あんたの親父さんだ」

明日奈を止める間も無かった。彼女はベッドに覆いかぶさり、泣き崩れた。

「会いたかった……お父さん……お父さん！」

俺は、黙って明日奈の背中を撫でてやった。

良かったな、明日奈。

生還した城国前主任は亜空間での記憶が無く、期せず

して若返った自分に驚いていた。

脱出については様々な角度から検証がなされたが、取り立てて有力な仮説は出なかった。亜空間内で時間が逆転しており、従って消費したキマ燃料も回復し、ちょうどそこに宇宙への穴が開いたため脱出しようとした。タイムリングよくそれを手伝ったのが俺達だった、というのが一番筋の通った仮説として採用された。俺達が奮闘している間に亜空間に783-CM35が吸い込まれずにいたのは、何のことはない、出力全開で粘っていたのだ。その亜空間の謎は今も解明されていない。

あの日から9年の歳月が流れた。

『E3-R22、着線！ 異常なし！』

『783-CM35、着線！ 異常なし！』

苗穂は宮原と結婚してから地上勤務になり、旦那の宮原は勇退した平前司令の後継として司令を務めている。幡生先輩は主任の座こそ降りたが、相変わらず基地の肝っ玉母さん（独身）として君臨している。何度も死線を潜り抜けてきたが、それについてはまた語る機会もあるだろう。大垣は他の星に転勤したが、度々仕事でこっちに来る。ガンフロンティアの経済も立ち直りつつあり、ワダーンとの関係も良好だ。

俺や明日奈、城国前主任は頻度こそ落ちたが星の海を疾駆する日々を送っている。

「485・D032、着線！ 異常なし！」

『500-V2、着線！ 異常なし！』

『E257-NA07、着線！ 異常なし！』

相棒から降り、家路に着く。

家では今でも相変わらずツインテールの妻、娘、息子、そして自分よりも若いお義父さんが待っている。